

氏名	野 村 武 生
学 位 の 種 類	医 学 博 士
学 位 授 与 番 号	乙 第 864 号
学位授与の日付	昭和52年 6 月 30 日
学位授与の要件	博士の学位論文提出者 (学位規則第 5 条第 2 項該当)
学 位 論 文 題 目	慢性閉塞性動脈疾患における血中ステロイドホルモンの動態に関する研究
論 文 審 査 委 員	教授 田 中 早 苗 教授 大 藤 眞 教授 関 場 香

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

慢性閉塞性動脈疾患の成因と病態とは性ホルモンと密接な関連があるという報告は多いが、血中レベルでの内分泌環境の解析とそれに基づく臨床治療には十分なものがない。著者は radioimmunoassay 法による血中 estradiol (E_2), estriol (E_3), progesterone (P), testosterone (T), cortisol (F) の同時測定を実施し、大動脈炎症候群患者 18 名, Buerger 病患者 10 名, 閉塞性動脈硬化症患者 11 名を対照とし、正常成熟婦人および男子と比較検討を試みた。大動脈炎症候群は、急性期末治療群, 急性期 predonisolone (PSL) 投与群および寛解期群とに分け全月経周期における上記 5 種の血中ステロイドホルモンの推移変動を検討し、また臨床で繁用されている PSL の投与が本症の内分泌環境に及ぼす影響についても併せて検討した。

I 大動脈炎症候群について

- 1) 本症では血中 E_2 値の 2 峰性変動パターンに乱れが認められた。PSL 投与群では黄体期 $117 \pm 94 \text{ pg/ml}$ と、正常 $359 \pm 95 \text{ pg/ml}$ に比較して有意の低値であった。
- 2) 本症の血中 E_3 値は、すべて測定感度以下であり、正常 $25 \pm 17 \text{ pg/ml}$ と比較して明らかに低値であった。
- 3) 本症の血中 P 値は無排卵症例をのぞき、いずれも排卵後の急激な有意の増量がみられた。PSL 投与群は黄体期ピーク時 $2.32 \pm 1.25 \text{ ng/ml}$ で、他の群に比較し低値の傾向を認めた。また PSL 投与群にのみ無排卵の 3 症例が認められた。
- 4) 本症の血中 T 値は、正常でみられる排卵期の増量傾向が消失しており、とくに PSL 投与群では、血中レベルの低下が認められた。
- 5) 血中 F 値は急性期末治療群 $61 \pm 25 \text{ ng/ml}$, 急性期 PSL 投与群 $91 \pm 45 \text{ ng/ml}$, 寛解期

111±42 ng/ml であり，急性期には正常に比較して有意に低値であった。

II Buerger 病および閉塞性動脈硬化症について

両者における血中 E_2 ，P，T および F 値については，正常成熟男子と比較して有意の差を認めなかった。血中 E_3 値は，正常成熟男子を含めて測定感度以下であった。したがって，血管壁の弾性維持に関係すると考えられる E_3 については，さらに精度の優れた測定系を確立し，その動態を明らかにする必要がある。

論文審査の結果の要旨

慢性閉塞性動脈疾患における血中 Steroid Hormone の動態に関する臨床的研究である。従来検索が困難とされていた多種血中 Steroid Hormone の同時測定を実施し，慢性閉塞性動脈疾患における内分泌環境の解析を試み，多くの新知見を得たものとして価値ある業績であると認める。

よって，本研究者は医学博士の学位を得る資格があると認める。